日本赤十字豊田看護大学紀要 14 巻 1 号，65−72，2019

研究報告

立ち会い分娩を体験した夫の分娩経過中の気持ち

千葉　朝子[1]　中垣　明美[2]　村瀬　智子[1]

要旨

本研究の目的は、立ち会い分娩を体験した夫の分娩経過中の気持ちを明らかにすることである。立ち会い分娩をした夫 8 名に半構造化面接を実施し、質的帰納的に分析した。病院への連絡から児が生まれたときまで【予期せぬ分娩の始まり方に対する不安】【分娩進行に伴う変化に何が起こっているのかわからない不安】【五体満足を確認するまでの不安】と分娩の経過中不安を感じていた。また、分娩進行により妻に起こる変化に【痛がっている妻を前にして何をしてあげていいのかわからない戸惑い】や【苦しむ妻のために何もしてやれない無力感】を感じていた。不安や戸惑いなどを感じつつも妻へのサポートとして【妻を励ましながら一緒に頑張る】ことで懸命に妻をサポートしていた。立ち会い分娩をする夫は、分娩経過中、不安、戸惑い、無力感を感じていることから、夫に対する精神的支援の必要性が示唆された。

キーワード　夫立ち会い分娩　夫の気持ち　出産　不安

Ⅰ．はじめに

分娩への夫の立ち会いは、1947 年のアメリカにおける「夫にコーチされた分娩」の提唱が始まりとされ、ラマーズ法と共に普及した（松本，1992，p360）。我が国における夫立ち会い分娩は、1972 年に日本赤十字社医療センターにおけるラマーズ法による出産を希望した夫婦を受け入れたことが最初とされている（及川，宮田，新道他，2012）。

立ち会い分娩をする夫の役割には、妻への精神的支援・産痛緩和・呼吸法の誘導などがあるとされている（キッシンガー，1985）。夫が主体的に分娩時に必要な役割を果たすためには、産前教育での知識の普及が重要であるとされ、分娩経過や産痛緩和、呼吸法の指導などの教育がされている（木村，星野，菊池，2005）。しかし、分娩進行に伴う産婦の外見上の変化は男性にとっては苦痛であり激しい感情の動きを起こす（M.H. クラウス，J.H. ケネル，P.H. クラウス，2005，p159）ため、妻への十分な援助ができない思いを抱く者もいる。実際に分娩に立ち会った夫の反応では、生命の誕生に感動したという声がある反面、苦しむ妻の姿に圧倒され何もできないという無力感を持つ者もおり、立ち会いにおける分娩の満足感も妻に比べ夫の満足感は低くなっている（出口，米村，福井，1999）。立ち会い分娩の際に妻が夫に望むことは情緒的な支援である（出口，米村，福井，1999）が、情緒的支援者の役割を果たさなければならない夫自身が、分娩経過中、無力感以外にも不安や緊張の中で過ごしていることも考えられるが、分娩進行に伴い変化していく妻を間近に見ている夫の気持ちについての研究は少ない。分娩に立ち会う父親は分娩経過に伴い起こる変化が普通のことなのかどうか鑑別できない（M.H. クラウス，J.H. ケネル，P.H. クラウス，1996，p85）といわれるように、産婦に起こっている変化が理解できないために母親学級での既習知識をいつどのように実施すべきかについても戸惑いも持っていると考えられる。これらのことから産婦同様に分娩に立ち会う夫にも分娩経過に応じた助産師の情緒的・手段的サポートが必要であると考える。そのためには、分娩に立ち会った夫が分娩経過中にどのような気持ちでいるのかを明らかにすることが必要であると考え、今回の調査に取り組ん

[1] 日本赤十字豊田看護大学
[2] 名古屋市立大学

だ。本研究の目的は、立ち会い分娩を体験した夫の分娩経過中の気持ちを明らかにすることである。

Ⅱ．用語の定義

1．立ち会い分娩

本研究における立ち会い分娩とは、分娩経過中、夫が産婦の身体的・精神的支援を行いながら、そばに付き添うことを言う。

2．分娩経過

本研究における分娩経過とは、産徴、破水、陣痛開始などの正期産における分娩入院の適応となる状況の発生時から胎盤娩出時までとした。分娩経過を、「病院連絡から入院まで」「入院から分娩室入室まで」「分娩室入室後から児が生まれるまで」「児が生まれたとき」の時期別とした。分娩経過は数時間に及びその間に分娩は進行していくため、その間のことを分娩経過中とした。

Ⅲ．研究方法

1．研究デザイン

本研究は、質的記述的研究である。

2．研究参加者

正期産、経腟分娩の立ち会い分娩後、妻が産褥入院期間中に研究同意が得られた夫 8 名。研究対象施設の看護の責任者から条件を満たす研究参加者について紹介を受けた後、研究参加者に個別に研究参加を依頼し、同意が得られた者とした。

3．データ収集方法及び場所

インタビューガイドを用いた半構造化面接を行い、データを収集した。インタビュー内容は、「立ち会い分娩中はどのような気持ちだったか」である。分娩経過中の妻の状態の変化に伴う気持ちや児誕生時の気持ちを明らかにしたいと考えたため、「病院連絡から入院まで」「入院から分娩室入室まで」「分娩室入室後から児が生まれるまで」「児が生まれたとき」の 4 つの時期の気持ちを尋ねた。

インタビューは、研究参加者 1 名につき 1 回とした。インタビューの日時と場所は、研究協力施設と研究参加者の希望により調整し、妻の入院する褥室とは別にプライバシーが保持できる個室を使用し実施した。インタビュー内容は、研究参加者の同意を得て、IC レコーダーに録音した。

4．データ収集期間

2011 年 8 月 7 日～ 9 月 30 日

5．データ分析方法

データは、質的帰納的に分析した。IC レコーダーで録音したインタビュー内容から逐語録を作成し、繰り返し読み、全体像を把握した。次に逐語録から、「分娩経過中の気持ち」を分析の視点として、病院連絡から入院まで、入院から分娩室入室まで、分娩室入室後から児が生まれるまで、児が生まれたときの時期別の気持ちを分析した。逐語録から、意味のまとまりごとに抜き出し、コード化した。コード間の類似性と相違性を比較し、サブカテゴリーとしてまとめ、抽象度を高めながら、共通する意味のまとまりごとにまとめ、カテゴリー化した。分析の全過程において、質的研究の研究者からスーパーバイズを受けた。

6．倫理的配慮

研究施設の組織する倫理委員会の承認を得て実施した。

研究協力にあたっては、研究参加者に、文書および口頭で、研究目的・方法・プライバシーへの配慮・研究参加は自由意志であること・研究の途中での同意の撤回や自体が可能であること・研究参加の中止により不利益はないこと・匿名性の保持とプライバシーの厳守・研究結果の公表について説明し、文書により承諾を得た。

Ⅳ．結果

1．研究参加者の概要

研究参加者の概要は表 1 に示すとおりである。年齢は、20 代が 5 名、30 代が 3 名であった。立ち会いの回数は、初めてが 5 名、2 回以上が 3 名であった。立ち会いの時期は、入院時が 5 名、入院から分娩室入室までの間は 3 名であった。両親学級の受講は、6 名がありで、2 名がなしであった。インタビューの平均時間は、38 分 29 秒であった。

表 1　研究参加者の概要

参加者	夫の年齢	妻の年齢	立ち会い回数	入院理由	分娩様式	立ち合い開始の時期	両親学級の受講
A	20代	20代	初めて	陣痛開始	正常	入院から分娩室入室までの間	あり
B	20代	20代	初めて	陣痛開始	正常	入院から分娩室入室までの間	あり
C	20代	20代	初めて	陣痛開始	正常	入院時	あり
D	30代	30代	3回目	出血(産徴)	正常	入院から分娩室入室までの間	なし
E	20代	20代	2回目	陣痛開始	正常	入院時	なし
F	30代	30代	2回目	破水	正常	入院時	あり
G	20代	20代	初めて	破水	正常	入院時	あり
H	30代	30代	初めて	破水	吸引	入院時	あり

2. 立ち会い分娩を体験した夫の分娩経過中の気持ち

立ち会い分娩を体験した夫の分娩経過中の気持ちに焦点を当てて分析した結果、16 のカテゴリー、34 のサブカテゴリーが抽出された。研究の真実性を確保するために、表中には代表的な語りを記述した。(表 2-1 ～表 2-2)。以下、【　】をカテゴリー、〈　〉をサブカテゴリーで示す。

1）病院連絡から入院まで

(1)【すぐに産まれないという軽い気持ち】

分娩は長くかかるというイメージから、分娩開始直後の今からはまだ長くかかるだろうと、すぐには産まれないという気持ちを表すカテゴリーである。〈分娩経過が長くかかるイメージで、すぐには産まれないと思う軽い気持ち〉の 1 サブカテゴリーで構成される。

(2)【予期せぬ分娩の始まり方に対する不安】

両親学級で聞いていた説明や前回の分娩とは異なる分娩の始まり方に対する不安や心配な気持ちを表すカテゴリーである。〈通常の出産の流れとは異なる陣痛開始直後からの短い陣痛間隔への強度の不安〉〈前回と違う予期せぬ破水に対する不安〉の 2 サブカテゴリーで構成される。

2）入院から分娩室入室まで

(1)【分娩が気になって落ち着かない】

すぐには分娩にならないとわかっていても、妻のそばを離れ外に出ている間にも分娩が気になり落ち着かない気持ちを表すカテゴリーである。〈すぐに産まれないとわかっていても、外に出ている間に分娩にならないか気になり落ち着かない〉の 1 サブカテゴリーで構成される。

(2)【分娩進行に伴う変化に何が起こっているのかわからない不安】

遷延する分娩や陣痛の変化、産痛に苦しむ妻と二人きりにされることに対する不安な気持ちを表すカテゴリーである。〈分娩経過の想像以上の長さに抱く先の見えない不安〉〈急に強くなった陣痛への不安〉〈妻の中で今何が起こっているかわからない不安〉〈痛がっている妻と二人きりにされる不安〉の 4 サブカテゴリーで構成される。

(3)【痛がっている妻を前にして何をしてあげたらいいのかわからない戸惑い】

妻の産痛の程度がわからず、産痛で苦しむ妻を目の前にして、何をどうしたらよいのかわからないという戸惑いの気持ちを表すカテゴリーである。〈痛がっている妻を目の前にして痛みの強さが想像できないことへの戸惑い〉〈義母の妻への支援のように自分は妻を支援できない戸惑い〉〈効果もわからぬまま産痛緩和をやらざるを得ない〉〈慌ただしい分娩室入室でどうしていいかわからない戸惑い〉の 4 サブカテゴリーで構成される。

(4)【両親学級での説明や前回の分娩経過と異なる状況に対する戸惑い】

実際の分娩において、両親学級や前回での分娩の学習が有効に活用できない戸惑いを表すカテゴリーである。〈両親学級での説明と異なる分娩室入室時期に対する戸惑い〉〈両親学級での学習を忘れてしまったという焦り〉〈前回の経過と全然違う経過への戸惑い〉の 3 サブカテゴリーで構成される。

(5)【助産師の説明や声かけに感じる安心感】

助産師の分娩経過の説明や声かけに精神的な安心感を得たことを表すカテゴリーである。

〈助産師の分娩経過の説明や声かけに感じる安心感〉の 1 サブカテゴリーで構成される。

3）分娩室入室後から児が生まれるまで

(1)【分娩中の光景に圧倒される気持ち】

見知らぬ医療スタッフの中で、努責を開始した

表 2-1　立ち会い分娩を体験した夫の分娩経過中の気持ち

時期	カテゴリー	サブカテゴリー	代表的な語り
病院連絡から入院まで	すぐに産まれないという軽い気持ち	分娩経過が長くかかるイメージで、すぐには産まれないと思う軽い気持ち	・テレビとか話を聞くと凄く長いイメージだったので、「まっ、今日とかそれぐらいかな？」ってイメージで、その時はまだ陣痛が弱いからって大体15分ぐらいの間隔だったので、ちょっと軽い気持ちというか。(A氏)
	予期せぬ分娩の始まり方に対する不安	通常の出産の流れとは異なる陣痛開始直後からの短い陣痛間隔への強度の不安	・僕も最後は、両親学級には参加して、出産の流れを説明した紙とか貰って、「陣痛が軽くきます」みたいな、最終的にそれが10分間隔ぐらいになってきたら病院に連絡してくださいね、みたいな話だったんですけど、もうスタートが「ちょっとお腹痛いかも」って言うところは確かに緩い痛みだったんですけど、その次は3分間隔っていう短い間隔だったんで、もうやばいともう、一気に不安だけがドーンとあがってというような感じですね。(H氏)
		前回と違う予期せぬ破水に対する不安	・破水して始まるとは思っていなかったんで、破水から始まってどうしようかと思った．前回とは違うので。(F氏) ・向こうは冷静でしたけど、前期破水とか何とか言って。破水して大丈夫なのかなって、自分はそういうことはあるまでは、破水が来たので大丈夫かなって、焦りじゃないんですけど、身体は大丈夫かっていう気持ちになりました．前回とは違ったんでどうかなっていうふうには思いました。(F氏)
入院から分娩室入室まで	分娩が気になって落ち着かない	すぐに産まれないとわかっていても、外に出ている間に分娩にならないか気になり落ち着かない	・自分ではどうしていいかわからなくて、奥さんが「ご飯食べに行っていいよ」って言ってくれたんで、自分で出にくいっていうのがあったんで、言ってくれたんで「じゃあ」って、バーッて早く食べれるところで食べて、電話かかってきてもすぐに出れるようにしておかないかん、携帯の着信気にしながら、気づかないといけないんで。(F氏)
	分娩進行に伴う変化に何が起こっているのかわからない不安	分娩経過の想像以上の長さに抱く先の見えない不安	・妻もいつ（分娩室に）入れるのかなって思っていました。想像以上に長かったんで、僕たちの場合は、先が見えなかったので、苦しかったっていうのもありました。(B氏)
		急に強くなった陣痛への不安	・今まで弱かった陣痛がころっと変わるのかなって、そんなに早いのって。(A氏) ・促進剤の量とかも僕ら解らないじゃないですか、どんどん痛くなってくるんで、ほんと、大丈夫なのかなってね。もう、そのへんは信用するしかないんでね。(C氏)
		妻の中で今何が起こっているかわからない不安	・時間が短い中でいろんな事があったものですから、正直妻の中で、今何が起こっているのかが、全然、自分、理解できてないままで。(H氏)
		痛がっている妻と二人きりにされる不安	・結構忙しそうにしていて、「ちょっと出て行きますね」みたいな感じで、僕と（妻と）二人だけになるじゃないですか、すごく痛がっているし。すぐ戻ってきてくれるんですけど。(B氏)
	痛がっている妻を前にして何をしてあげたらいいのかわからない戸惑い	痛がっている妻を目の前にして痛みの強さが想像できないことへの戸惑い	・陣痛が短くなってきて、痛みも強くなって。我慢強い性格なので、表情にもあんまりでない。相当痛いんだろうけど、どれだけ痛いかわからない。痛い痛いって言っているんだけど，僕の思っている痛いと奥さんが痛いって言っている痛みとマッチしないんだろうなって，感じがありました。予想してこれぐらい痛いんだろうなとか、本当はもっと痛いだろうなんて。(G氏) ・何をしてあげればいいのかわからなくて、それが一番わからなくて、一番困ったことですね。僕としては、声をかけることしかできないし、身体をさするもの一回気持ち悪いって吐いちゃったんで、あんまりさすってほしくないのかなって思ったり．さすると「気持ち悪くなるからやめて」って。じゃあどうすればいいんだろうって。(G氏)
		義母の妻への支援のように自分は妻を支援できない戸惑い	・僕があまりいけなかったところがあって、奥さんとお母さんだけで進んじゃって、僕としては本当は二人でやりたかったんですけど。何もできなかったかもしれないけど、お義母さんは自分も経験しているから、こうされてほしくないということはやらないし、やってほしいことはわかっているからやるし、奥さんにはよかったと思うんですけど。僕が思う出産というのは、最初はそうじゃない方がいいと思うんですよ。手探りでやって、後で出産したときに、旦那頑張っていたなってそういうふうに思われたかったなって思います。(G氏)
		効果的かもわからぬまま産痛緩和をやらざるを得ない	・入院してからはずっと腰をさすっていました。「さすってもらってどう」って聞くと「（産痛は）改善しないけど気が紛れる」というので、ずっとさすっていました。(E氏) ・とりあえず今いきんだらだめだって言うところで、おしり押さえて力が入らないようにしてくださいって言われたけど、すぐ目の前で押さえてくださいって言われても、なかなかすぐにはできない。もうやらざるを得ない状況なんだけど。(B氏)
		慌ただしい分娩室入室でどうしていいかわからない戸惑い	・分娩室入る直前は痛みの間隔が短くなってくるし、痛みもすごくなってくるし、だけどいきんじゃいけないし、本人にとっては緊急な状態だとは思うんですけど、助産師さんは分娩室の準備しなくちゃいけないとか、色々手配しなくちゃいけないとか色々やることがあって、ずっとつきっきりの状態でいることはできないとは思うけど、知識も何もないし、何していいかわからないし。(H氏)
	両親学級での説明や前回の分娩経過と異なる状況に対する戸惑い	両親学級での説明と異なる分娩室入室時期に対する戸惑い	・（両親）教室の時は一緒に分娩室に入って立ち会いますよって感じだったから子宮が全部開いてからと思っていた。開く前から入るんだって。(A氏)
		両親学級での学習を忘れてしまったという焦り	・1か月とか2か月前にパパママ教室受けてたんだけど、正直言って忘れちゃっているというのもあった。(B氏)
		前回の経過と全然違う経過への戸惑い	・陣痛の間が前回と全然違うんですよね。強い痛みが長かったのが初産だったんですけど、今回は、普通に我慢できる痛みっていう時間が大半で、入院してから本当に痛い時間が短かったので、前回との比較がさほどできず、気がついたら分娩室って感じでした。(E氏)
	助産師の説明や声かけに感じる安心感	助産師の分娩経過の説明や声かけに感じる安心感	・何cmですよって診察のあとに説明してくれた。(B氏) ・助産師が声をかけてくれたり、精神的に安心感があった。(B氏)
分娩室入室後から児が生まれるまで	分娩中の光景に圧倒される気持ち	助産師の声掛けに安心しつつも、分娩中の光景に圧倒される	・助産師さんは手際よく、「大丈夫ですよ。はい、いきんで」って感じでやっているんで全然安心感はありましたけど、「出てきましたよ」って経過も教えてくれて、奥さんも随分いきむことができたし、僕もあとどのくらいって把握できたんでよかったんですけど、その光景に圧倒されたというか。(G氏) ・ずっと妻の横に立ってて、もうさすってはいなくて、気がまぎれるように、会話はあまりしていないですね。そっとしておいたっていうか。(G氏) ・早いなあって、自分がその速さについていけなかった。(F氏)
	苦しむ妻のために何もしてやれない無力感	苦しむ妻の様子に、頭の中が真っ白になり、そばにいても何もできない無力感	・すごい苦しんでいるんで、僕としては頭の中が真っ白になっちゃって、何もできないじゃないですか。手を握って「大丈夫。大丈夫。頑張って、頑張って」くらいしか言えないんで、もう叫んだり、泣いたりとかしてて。(H氏) ・「痛い。痛い」ってすごく大きな声出したりとか、「もう無理」とか、そういうこと全然言わない人なのに、それを聞くとどんなに痛いんだろうって想像して、考えているうちに、次の声が「痛い痛い」ってきてもうぼーっと立っている感じでしたね。(G氏)
	医療者の言葉や行動に高まる不安	医療者の使う専門用語がわからず何が起きているかわからない不安	・医師や看護師がしゃべっている医療用語に「何だろう。何かあったのかな」と思った。(H氏)
		スタッフがそばにいなくなるときに感じる不安	・助産師さんはまだ時間がかかると思って向こうの方へ、優先してすすんでいると思うんですけど「すぐ戻ります」って、すぐ戻っては来てくれるんですけど、二人きりの時は今出てきたらどうしようって。(B氏)
		慌ただしいスタッフの動きに対する戸惑い	・普通分娩は普通分娩でしたけど、あのちょっとそのままだと、もう危ないかなってところで、先生が2人、3人と増えてって。(H氏)
		見知らぬ医療スタッフの中での緊張	・言ってみれば赤の他人、助産師さんて。どこかで気を張っていたところがあった。(A氏)

表 2-2　立ち会い分娩を体験した夫の分娩経過中の気持ち

時期	カテゴリー	サブカテゴリー	代表的な語り
分娩室入室後から児が生まれるまで	自分の存在が役立っているのかという戸惑い	初めての体験で自分がどうしたらいいのかわからない戸惑い	・スタッフも忙しそうで、僕も分娩に立ち会ったことがないので何をしていいかわからないので、あれしたらいいよとかもなかったので、少し戸惑いというか。ガウン着せられて、マスクして、じゃあ入ってくださいという感じで何をしていいかわからない。(A氏) ・立ち会ってどうよりも、本当に居ただけ。(H氏) ・立ち位置が分からず、出産がどうこうっていうよりも自分がどうしたらいいのかよくわからず，座っとるだけでいいのかなあって感じで、「大丈夫だよ。もうすぐだよ」っていうのは言っていたんですけど、座っとったほうがいいのか、立っとったほうがいいのか、向こうは苦しんでいるのに座っていてもいいのかなあとか。(F氏) ・正直あんまり分娩室に入ってからは、立ち会っているだけで、どちらかというと、やっている側からすると、どちらかと言うと正直、邪魔な人間、存在だと思うんですよ。きっと。正直居るだけで、何にも手伝えないし、勿論そんな医療行為もできない訳ですから、基本的に一緒に居るだけで。(H氏)
		妻になんと声をかけていいのかという戸惑い	・本当に向こうが大変な時に「大丈夫」っていう声掛けは必要だと思うんですけど、あんまり「がんばれ。頑張れ」って言ってもいかんし、なんて言っていいのか考えながらいろいろ言っていた感じですね。(F氏)
	妻を励ましながら一緒に頑張る	助産師の言葉をまねて、妻を励ましながら一緒に頑張る	・助産婦さんの言葉を僕も繰り返して、嫁に対して「吐いて」とか「いきんで」とかいうのを僕が言って、助産師さんが言って、僕が言って、というのを繰り返していました。(E氏)
	自分や妻に対する医師や助産のケアに抱く安心感	信頼できるスタッフのリードでもう産まれる安心感	・もう産まれるんだっていう、肩が出て大丈夫って、そこはもう安心感があった。(A氏) ・しっかりリードしてくれて、いい感じで(分娩)できた。(B氏) ・定期健診でいつも見てもらっている先生に取り上げてもらって、助産師さんも一人目の時に見かけた先生なので、信頼して、大丈夫だなって感じでした。(F氏)
		助産師が自分を気にかけてくれた嬉しさ	・助産師さんが結構気にかけてくれたっていうか、結構忙しそうにしていたんですけど、僕に「ここに座っていいよ」とか「これ飲んでいいよ」とか。助産師さんからすると、結構出産する人間と出てくる子に集中するじゃないですか。僕のほうまで気がいかないことのほうが多いんじゃないかって勝手な思いなんですけど、そこを気にかけてくれたのは結構うれしかったと思います。そこにいる人間として認識してもらえた。(E氏) ・その世界に入り込めず、傍観者じゃないですけど、空気になっちゃうのかなっていうのがあったので、そういう面がなくって良かったかなって思います。(E氏)
		頑張る妻を支える助産師に対する感動	・すごく感動しました。こんなに頑張っている、女の人ってすごいなって思いました。(G氏) ・あれだけ妻が頑張っているのを見るのはなかなかないと思うんで、すごく苦しそうなんだけど、助産師さんが声かけてくれると嬉しそうな顔するので、やっぱり感動しましたね。(B氏)
児が生まれたとき	五体満足を確認するまでの不安	児が無事生まれ、五体満足を確認するまでの不安	・五体満足か確認して、ちゃんと産声は聞こえるかなって耳を澄ませながら、不安に思いながら一部始終を見てましたね。(E氏) ・最後の最後まで本当に出てくるまでは何があってもおかしくないので全然安心できなかった。(H氏)
	母児ともに無事であることへの安堵感	母児ともに無事であることへの安堵感	・どちらも無事で安心しました。それが一番大きいですかね。両方とも無事というのが、一番安心してよかったと思いました。(E氏) ・母体も元気だし、(赤ちゃんも)元気だし、一安心(F氏)
		緊張から解放された安堵感	・それまで慌ただしかったっていうのもあるので、初産だってこんなに早く産まれるんだっていう感覚だったのが、無事産まれて緊張が解けて安堵したっていう気持ちが強かった。(A氏)
	子どもが生まれた感動から芽生える自分の子どもができた実感	子どもが生まれたことに対する信じられない感動	・やっぱりすごいなって、ちょっと信じられなかったけど、産まれてきた瞬間「自分の子どもかあ」って感じで、あとはもうかわいいしかなかった。(C氏) ・赤ちゃんが生まれてきたときとかも、感動しましたね。(B氏)
		自分の子どもができた実感	・妊娠中はあんまり実感がなかったけど、実際に産まれるときに産まれたんだっていう感覚。本当に実感できる。産まれた瞬間、自分の子どもが出てきたって実感できる。(A氏)
		赤ちゃんしか見えない	目は赤ちゃんしか見ていなかった。(H氏)

妻のそばにいながらも、緊張の中で目の前の光景に圧倒され、気持ちがついて行かないことを表すカテゴリーである。〈助産師の声掛けに安心しつつも、分娩中の光景に圧倒される〉の１サブカテゴリーで構成される。

(2)【苦しむ妻のために何もしてやれない無力感】

分娩室入室後に、妻の産痛や努責感がさらに増強し、苦しむ妻のため何もしてやれない気持ちを表すカテゴリーである。〈苦しむ妻の様子に、頭の中が真っ白になり、そばにいても何もできない無力感〉の１サブカテゴリーで構成される。

(3)【医療者の言葉や行動に高まる不安】

医療者の言葉や行動に不安が高まる気持ちを表すカテゴリーである。〈医療者の使う専門用語がわからず何が起きているかわからない不安〉〈スタッフがそばにいなくなるときに感じる不安〉〈慌ただしいスタッフの動きに対する戸惑い〉〈見知らぬ医療スタッフの中での緊張〉の４サブカテゴリーで構成される。

(4)【自分の存在が役立っているのかという戸惑い】

分娩室入室後に自分はどこにいて何をすればいいのかわからないことから生じる戸惑いの気持ちを表すカテゴリーである。〈初めての体験で自分がどうしたらいいのかわからない戸惑い〉〈妻になんと声をかけていいのかという戸惑い〉の２サブカテゴリーから構成される。

(5)【妻を励ましながら一緒に頑張る】

何をしていいか戸惑いながらも、懸命に妻を励ます気持ちを表すカテゴリーである。

〈助産師の言葉をまねて、妻を励ましながら一緒に頑張る〉の１サブカテゴリーで構成される。

(6)【自分や妻に対する医師や助産師のケアに抱く安心感】

助産師の妻や自分に対するケアや医師や助産師への信頼に安心感を得る気持ちを表すカテゴリーである。〈信頼できるスタッフのリードでもう産まれる安心感〉〈助産師が自分を気にかけてくれた嬉しさ〉〈頑張る妻

を支える助産師に対する感動〉の３サブカテゴリーで構成される。

4）児が生まれたとき

(1)【五体満足を確認するまでの不安】

生まれてきた子どもに異常がないことを確認するまでの不安な気持ちを表すカテゴリーである。〈児が無事に産まれ、五体満足を確認するまでの不安〉の１サブカテゴリーで構成される。

(2)【母児ともに無事であることへの安堵感】

子どもが無事に生まれ、母児ともに無事であることを確認し、緊張から解放された安堵感を表すカテゴリーである。〈母児ともに無事であることへの安堵感〉〈緊張から解放された安堵感〉の２サブカテゴリーで構成される。

(3)【子どもが生まれた感動から芽生える自分の子どもができた実感】

子どもが生まれたことに感動し、自分の子どもである実感がわく気持ちを表すカテゴリーである。〈子どもが生まれたことに対する信じられない感動〉〈自分の子どもができた実感〉〈赤ちゃんしか見えない〉の３サブカテゴリーで構成される。

Ⅴ．考察

今回の研究結果から、立ち会い分娩を体験した夫が分娩経過中に抱いている具体的な気持ちが明らかになった。

病院連絡から入院までの間は【すぐに産まれないという軽い気持ち】であったが、入院以後は【分娩が気になって落ち着かない】、分娩室入室から児が生まれるまでは【分娩の光景に圧倒される気持ち】と分娩の進行に伴い、気持ちが段々ついて行けない状態となっていた。

不安は、病院連絡から児が生まれたときまで継続している気持ちであった。不安の内容は、病院連絡から入院までは【予期せぬ分娩の始まり方に対する不安】、入院から分娩室入室までは【分娩進行に伴う変化に何が起こっているのかわからない不安】、分娩室入室から児が生まれるまでは【医療者の言葉や行動に高まる不安】、児が生まれたときは【五体満足を確認するまでの不安】と予測できない分娩の状況に対して不安を抱いていた。不安な気持ちに加え、入院から分娩室入室までは【痛がっている妻を前にして何をしてあげたらいいのかわからない戸惑い】、【両親学級での説明や前回の分娩経過と異なる状況に対する戸惑い】、分娩室入室から児が生まれるまでは【自分の存在が役立っているのかという戸惑い】を感じていると同時に【苦しむ妻のために何もしてやれない無力感】を感じていた。分娩に立ち会う夫の気持ちは、不安、戸惑い、無力感などのストレスの強い状態にあることが本研究から明らかになった。

夫が主体的に分娩に臨むためには産前教育が重要である（木村，星野，菊地，2005）とされている。今回の研究参加者は経産婦の夫２名を除き、初産婦の夫は、全員が両親学級を受講していた。しかし、実際の分娩に際しては、【両親学級での説明や前回の分娩経過と異なる状況に対する戸惑い】を感じていた。本研究の結果から、両親学級での受講内容と実際の分娩経過が違う場合には、夫の不安や戸惑いが大きくなることから、不安や戸惑いが軽減できるよう夫への分娩経過の説明を行う重要性が示唆された。経産婦の夫についても、初産婦と経産婦では分娩進行が異なるため、両親学級受講の必要性が示唆された。

不安や戸惑い、無力感という気持ちは【助産師の説明や声かけに感じる安心感】、【自分や妻に対する医師や助産師のケアに抱く安心感】と医師や助産師の支援に対し、安心感を得ることができていた。分娩室入室後は、【自分の存在が役立っているのかという戸惑い】を感じている一方で、〈助産師が自分を気にかけてくれた嬉しさ〉を感じていることから、分娩経過中は、妻のみではなく、夫へのケアの必要性が示唆された。

立ち会い経験の中で満足感に影響するものは、妻への支援、妻からの肯定的反応、新生児との接触である（松田，2015）ことから、夫が妻への支援を十分に行え、夫自身が満足できるような支援が必要である。夫自身が落ち着いた気持ちの中で、妻をサポートし、児の誕生を迎えることができ、立ち会いに満足できるよう夫への情緒的支援をすることで、夫婦共に満足する立ち会い分娩となると考える。

Ⅵ．結論

立ち会い分娩を体験した夫の分娩経過中の気持ちを

明らかにすることを目的に研究を行った結果、以下のことが明らかとなった。

1. 病院連絡時から児が生まれるときまで、不安、戸惑い、無力感を感じ、強いストレス状態にあると考えられるため、夫への情緒的支援の必要性が示唆された。
2. 助産師の自分に対するケアに安心や嬉しさを感じていることから、分娩に立ち会う夫の存在を尊重したケアの必要性が示唆された。
3. 児が生まれたときには、母児ともに無事であることに対し安堵感を感じ、児が生まれた感動から父親の自覚が芽生えていた。

利益相反

本研究の全ての著者において、開示すべき利益相反はない。

謝辞

お忙しい中、研究にご協力いただきました研究参加者の皆様、研究を快く承諾していただきました研究施設の皆様に深謝いたします。

なお、本研究は、平成 23 年度愛知県看護協会看護研究助成金を受けて実施した。この論文は、平成 23 年度社団法人愛知県看護協会研究助成金研究報告書を加筆・修正したものである。

引用文献

出口信子，米村聡実，福井奈美子，前田啓子，程修司（1999）．夫立ち会い体験の自己評価とその関連要因．母性衛生．40(4). 468-472.

木村弘子，星田秀子，菊池千代子（2005）．参加型両親学級の企画運営を通して - 父親のニーズと満足感を考える -．日本看護学会論文集第 36 回母性看護．9-11.

M.H.Klaus, J.H.Kennell, P.H. Klaus（1993）/ 竹内徹訳（1996）．マザーリング・ザ・マザー．東京 ; メディカ出版．75.

M.H.Klaus, J.H.Kennell, P.H. Klaus（2002）/ 竹内徹，永島すみえ訳（2005）．ザ・ドウーラーブック．東京；メディカ出版．159.

松田佳子（2015）．立ち会い出産における夫の満足感と立ち会い体験および妻への親密性との関連．日本看護研究学会雑誌．38(1). 93-99.

松本清一編著（1992）．妊産婦ヘルスケア．東京．文光堂．360.

及川裕子，宮田久枝，新道由記子，登日麻並（2012）現代日本における男性と出産・育児．園田学園女子大学論文集．46．43-57.

シェーラ・キッシンガー（1985）．分娩における夫の役割と援助のしかた．ペリネイタルケア．4(4). 85-91.

Feelings of Husbands during Attending Childbirth

CHIBA Asako[1], NAKAGAKI Akemi[2], MURASE Tomoko[1]

[1]Japanese Red Cross Toyota College of Nursing
[2]Nagoya City University

Abstract

The purpose of this study is to identify the feelings of husbands during attending childbirth. We conducted semi-structured interviews with 8 husbands who had experienced attending childbirth, and performed a qualitative and inductive analysis. Husbands experienced the following anxieties in the process from calling at the hospital till his baby was born: 'Anxiety because the childbirth started in an unexpected way', 'Anxiety at not knowing what changes occur during a childbirth', and 'Anxiety remaining till the husband has ensured that the newborn is a normal functioning happy child'. The husbands also felt anxieties at seeing the changes in their wives, feelings such as 'Bafflement because the husbands do not know what they can do seeing the wives suffering and in pain' and 'Sense of helplessness because they cannot do anything to ease the situation of the wives suffering through the childbirth'. While feeling anxiety and frustration, the husbands assisted their wives by 'Doing their best together with the wives by encouraging them'. The findings suggest that husbands who attend childbirth would benefit from support for the emotional aspects because they experience anxiety, frustration, and a sense of helplessness in the whole process of the childbirth.